

〈修士論文要旨〉

東三河地域における野菜生産に関する研究

—— キャベツ生産を中心として ——

小 寺 鈴 子*

東海地方は日本を代表する工業地帯であるが、同時に代表的な農業地帯でもある。愛知県の野菜産地は、尾張平野平坦部の名古屋市周辺の近郊農業地帯、東三河の野菜生産地帯の2つの地帯によって構成され、いずれも太平洋ベルト地帯に分布している。性格的には尾張平坦部の都市近郊地帯と豊橋・渥美半島地域、また出荷先とその割合から全国流通品目と地場流通品目の2つに分けることができる。地元名古屋市をはじめとする比較的大きな消費地をひかえ、かつ東京、大阪というわが国の二大消費地の中間に位置するという地理的交通立地条件をいかし、さまざまな農産物において積極的な主産地形成を図り、わが国における先進的農業地帯としての地位を確立している。

本論文では、東三河地域における野菜生産について明らかにする。豊橋、渥美半島を含む東三河地域は、愛知県の代表的な農業地帯であり、全国でも有数の輸送園芸産地である。その中で、「愛知のキャベツ」として今や全国の市場に出回っており、「冬キャベツ」では作付面積、収穫量、出荷量ともに全国1位であるキャベツを取り上げる。この地域のキャベツ生産がどのように輸送園芸として発展しているか、また主産地形成が行われた要因としてどのようなことがあるのかを明らかにする。

また、キャベツは愛知県内でも東三河地域という比較的限られた地域で生産され、完全に特産地化されている。そのことから、地域の名前を背負ったブランド野菜の発展について考察する。近年広まりが著しい「地産地消」との違い、輸入野菜に対抗するための鮮度や安全性の確立、キャベツ生産地として全国的に有名な群馬県嬬恋村との比較調査から今後の東三河地域のキャベツ生産の方向性についての提案を考える。

研究方法としては、実際の現地調査を中心とし、これまでの発展過程、現在の状況の聞き取りを行い、農林業センサスや野菜生産出荷統計を利用してデータ分析も含めて行う。また、この地域が輸送園芸産地として発展した要因の一つである用水路整備、特に豊川用水についても調査する。さらにこの農業はどのように発展していくべきか、特産地化された野菜の輸送園芸はどのように行われていくべきかということ考察する。

今回の研究の結果、愛知県の東三河地域に位置する、豊橋・渥美地域のキャベツ生産が発展してきた要因としては、まず、耕地としてあまり適さないこの地域の土壌でも、適応範囲の広いキャベツは栽培が可能であったこと。そして、昭和43年の豊川用水の完成によって、渥美半島の先端まで通水して、畑地灌漑が可能となったこと。それにより、農業用水が確保されスプリンクラ

平成19年度 *文学研究科地理学専攻

一の設置により水に困らなくなったことである。これは、キャベツの作付面積が豊川用水通水後に飛躍的に広がったことからわかる。一方、それまで主流であっただいこんの作付面積は減少している。これは、日本人の食生活の変化の表れである。洋食を食べるようになり、キャベツの需要は伸びた。しかし、漬物にするための加工用だいこんの需要は減少したのである。このことは、農家単位の経営で調査しても明らかになったことであった。また、もともと経営規模が県内でも有数の広さを誇っていたこの地域は、トラクターをはじめとする各種機械の導入、キャベツの苗を畑に定植するのに使う移植機の普及により、大規模な耕地でも農作業の効率化が図れることによる。そして、この地域は、太平洋ベルト地帯に位置し、ちょうど京浜と阪神の中間にあたる。高速道路の開通により、交通網が発達して、この地域からは全国に出荷できる体制が整ったことである。さまざまな要因が重なったことにより、この地域はキャベツ生産地として発展してきたことがわかった。また、今まで考えていなかったことだが、日本人の食生活の変化が産地の形成に大きく関わっていることが明らかになった。